

座長抄録

プロソ'16 シンポジウム1 「パーシャルデンチャーによる機能回復」

若林則幸^a, 村田比呂司^b

Functional recovery in removable partial prosthodontics

Noriyuki Wakabayashi, DDS, PhD^a and Hiroshi Murata, DDS, PhD^b

一部またはすべての歯が欠損した患者さんに補綴的な治療を行い、一時期に喪失あるいは低下していた口腔機能を速やかに回復させて助けることは、補綴専門医の最も日常的で必須の診療である。近年、国民の人口バランスが急速に高い方へ傾き、欠損補綴の対象となる患者層も高齢化することにより、有病者に対して補綴治療を実施する機会が増加し、今日ではそれが一般的となった。さらに、各年代における残存歯数は年々増加しており¹⁾、その結果として無歯顎患者は減少する一方で、部分的な歯の欠損を有する高齢者数はむしろ増加している。すなわち、今日パーシャルデンチャーを必要とする患者さんの多くが、慢性的な歯周炎や二次う蝕などに罹患していることが推察される。パーシャルデンチャーの研究と診療技術の開発は、従来から診断と設計、そして治療方法、製作技術に至るまで、比較的健全な残存歯や口腔組織、口腔機能を前提として進展してきたことは否定できない。このため、今日実際にパーシャルデンチャーを必要とする患者さんに対する治療方針の立案は、従来より知られた情報からだけでは不十分と考えられる。

多くの高齢者が一部の歯を喪失すると、パーシャルデンチャーを装着したとしてもその後の残存歯のメンテナンスや義歯による口腔機能の保全を行うことが必要になり、さらに歯を失ったり、残存歯とパーシャルデンチャーの再治療を要する可能性も高い。慢性的な内科疾患に対して完治を求めるのではなく、身体機能の維持と安定を目指す医療が要望されているのと

じように、パーシャルデンチャーによる欠損補綴治療は、患者さんの口腔内の変化に対応しながら現状の保全を目的とすることが重要になると考えられる。一人ひとりの患者さんが必要とするパーシャルデンチャーを、将来に起こるべき口腔環境の変化を見据えて設計し、装着後におけるメンテナンスの計画を立案できることが、補綴専門医にとって重要な責務と考えられる。

以上のような背景のもと、本シンポジウムでは、パーシャルデンチャーによる口腔機能の回復を目指す上で欠くことのできない診療の指針について4名のエキスパートが論じた。ターゲットとなる機能低下の種類はそれぞれ異なるが、いずれも今日の欠損補綴を考える上で必須の問題であり、データを基に現状の分析と診療の指針を提言するものである。

月村論文では、パーシャルデンチャーを装着することの意義を、主として咬合と全身の運動機能との関連から解説する。高齢者が筋力や活動が低下している状態（虚弱）はフレイルと表現されているが、高齢者における義歯の装着と全身のバランス機能の関連をもとに、義歯装着の意義を議論する。鳥巣論文は、パーシャルデンチャーを含めた可撤性義歯の装着・使用が高齢者の栄養摂取と健康状態に及ぼす影響を、多施設による共同研究の結果から導かれる示唆を基に総括する。咬合支持数や義歯の使用状況などの補綴的な分析因子により、これらが身体的能力と健康関連 QOL などに対して異なる効果を示すことが明らかにされる。これ

^a 東京医科歯科大学大学院部分床義歯補綴学

^b 長崎大学大学院歯科補綴学分野

^a Removable Partial Prosthodontics, Graduate School, Tokyo Medical and Dental University (TMDU)

^b Department of Prosthetic Dentistry, Graduate School of Biomedical Sciences, Nagasaki University

らの結果は、義歯による補綴治療が患者さんの健康状態にどのように貢献できるか、その可能性について重要な知見を与えるものである。

一方、パーシャルデンチャーは失った歯が本来負担すべき咬合力を、残存歯の歯周組織と欠損部の顎堤に委ねるメカニズムによって、その機能が成立する。依田論文では、義歯床下粘膜への力の集中と実際に見られた骨吸収部位との関連を示し、生体と調和したパーシャルデンチャーの機能回復のメカニズムについて分析する。笹木論文では、審美的な機能の向上と金属アレルギーへの対応の観点から、近年注目されているノンメタルクラスプデンチャーに関して、最新の文献レビューに基づいた分析を行う。義歯としての有効性、支台歯への影響、耐久性に関する臨床エビデンスを基に、ノンメタルクラスプデンチャーの適応症と限界について考察が試みられる。

4名のエキスパートによる論文では、最新の研究結果による知見を基に、補綴装置としてのパーシャルデンチャーの意義について分析され、毎日の臨床において必須である欠損補綴の治療方針の立案や治療技術の選択について提言されるであろう。補綴専門医の日々の臨床に、また新しい視点からの情報が加わり、患者さんにとって大きな福音となることが期待される。

利益相反

開示すべき利益相反はない。

文 献

- 1) 厚生労働省, 歯科疾患実態調査. <<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/62-23.html>>; 2011.